

書評

大久保好唯著『移住—人生最後の夢をジャングルの開拓に賭けた男—伊藤勇雄』
(桐々社:2008 年)

Book Review: Ookubo Tadayosi, 2008. *Emigration: A biography of Itô Isao, who emigrated to Paraguay in his later life and trailblazed the undeveloped field*

三須田善暢*
MISUDA Yosinobu

Keywords: *Trailblazing, Emigration to South America, Itô Isao*

開拓, 南米移民, 伊藤勇雄

伊藤勇雄 (いとういさお、1898 (明治 31) 年-1975 (昭和 50) 年) といっても、岩手の現代史もしくは開拓・移民問題、郷土文学に興味を持つ人以外は聞いた事がない名前であろう。本書はこの知る人ぞ知る先人についての一般向け解説書である。

著者の大久保好唯氏は、すでに何冊も伊藤に関する伝記的著作を執筆してきた (大久保 1984, 1995)。大久保氏がいたからこそ、伊藤の伝記的な紹介・検討が詳細におこなわれたといえる (本書はそれらのダイジェスト版である)。また大久保氏以外でも、南米移民関係のドキュメンタリー番組を担当した NHK の相田洋氏によって詳細な記録が残されている (相田 2003)。そのほか、戦後伊藤が開拓に入った地区の記念史においても詳細に紹介されている (佐藤 1999)。

このように伊藤をめぐるのまとまった記録や紹介はいくつかある。しかし、学術的分野での研究・紹介という点では皆無に近い。本書評は、大久保氏の業績を紹介することを通じて、伊藤に関する今後の学術的研究の展開方向に関しての考察を試みるものである。

さて、伊藤の経歴を概観しよう。

- 1898 (明治 31) 年、東磐井郡薄衣村 (現一関市川崎町) の農家に生まれる。
- 1914 (大正 3) 年、牧師の感化を受けてキリスト教の洗礼を受ける。
- 1917 (大正 6) 年、両親の勧めで結婚。しかし 1 年で家を捨てて上京。
- 1920 (大正 9) 年、武者小路実篤の思想に共感し、九州の『新しき村』に入植。
- 1923 (大正 12) 年、九州から上京し、労働と思索の生活に入る。関東大震災にあう。九死に一生を得て帰郷。農民運動に没頭。
- 1924 (大正 13) 年、処女詩集『名乗り出る者』自費

出版。

- 1928 (昭和 3) 年、3.15 事件で検挙。父死去。2 度目の結婚。
- 1932 (昭和 7) 年、東磐実費診療所 (後の県立千厩病院) と薄衣実費診療所 (後の県立千厩病院薄衣診療所) を有志たちと設立。
- 1933 (昭和 8) 年、薄衣村議に当選。
- 1940 (昭和 15) 年、岩手県議に当選。2 期務める。
- 1945 (昭和 20) 年、煙山村 (現矢巾町) へ転居。
- 1946 (昭和 21) 年、岩手県農地委員就任。農地解放にかかわる。社会党から衆議院選挙に出るも落選。
- 1948 (昭和 23) 年、妻死去。
- 1951 (昭和 26) 年、3 度目の結婚。詩集『名乗り出る者』第 2 集出版。
- 1952 (昭和 27) 年、玉山村外山地区に入植。以後 15 年間開拓に従事。
- 1956 (昭和 31) 年、岩手県教育長就任。
- 1964 (昭和 39) 年、詩集『名乗り出る者』第 3 集出版。
- 1968 (昭和 43) 年、パラグアイへ移民。
- 1975 (昭和 50) 年、ブラジルにて客死。

彼は思春期に地元の牧師と仙台での学生生活 (北部逓信局通信生養成所) によって宗教のおよび文学 (特に詩) の感化を受ける。その後家を飛び出し上京後、大正デモクラシーの雰囲気の中、トルストイ、ホイットマンの影響を受け 22 歳の時に武者小路実篤らと出会って『新しき村』に入植した。ここで伊藤は宗教の問題に対して自己解決をし、あらゆる宗教の枠を超えたという独自の思想 = 「人間宗教」を考えだした。彼はこの思想に確信をもち、再び東京で生活するようになる。東京では土木作業をしつつ、大学で文学の授業等を聴講し思索を重ねていった。

* 国際文化学科

しかし関東大震災に遭遇する。朝鮮人と間違えられ二度も殺されそうになったところを助かって郷里に戻った後、彼は、今後の人生は私のためでなく何かの意志にそぐわねばならぬと誓い、岩手の農民運動、社会運動に邁進していく。労働農民党の支部を結成し、争議の支援、産青連運動の推進、実費診療所開設等をおこなっていく(この時期処女詩集『名乗り出る者』を出版)。

村議、県議として活動して終戦を迎え、戦後は社会党から衆院選に挑むも叶わず、開拓の仕事に従事する。「最も恵まれない自然条件での高冷地でも、こんな楽しい人間生活が可能だ、という一つのモデルを作りたい」(27頁)という理由により、54歳にして外山の開拓に従事した(なお戦中に満州移民も視察している)。

そして、南米・中北米旅行でみたパラグアイの土とジャングルに魅せられ、1968年70歳にしてパラグアイへ家族をつれて移住したのである。

このように伊藤は多彩な活動をおこなっていて、農民であり社会運動家であり政治家であり開拓者であり詩人でありと多様であるが、その本質は「求道者」かつ「ロマンチスト」であったといえるのではないかと。そうでなければ、どうして70歳近い老人が南米に「理想郷の基礎をきづき、学園¹⁾をつくり、……人間の理想的生活と、未来の文化のモデルをつくりたい」(大久保1995:201頁)と考え、実践できるだろうか。

本書の内容紹介に移ろう。序章から三章までは伊藤についての評伝である。これまで大久保氏が書きまとめた本からの要約抜粋となっており、伊藤の経歴と仕事を知ることができる。ダイジェストゆえにより具体的な事例については大久保(1995)などを読まねばならないが、実費診療所の活動については1章をとって詳述されている。第四章は伊藤の実弟に対するインタビュー記録である。時代の証言として、親族に対するオーラルヒストリーは今後重要になるだろう。第五章では伊藤の代表的詩作が紹介されている。終章以降は死後の開拓地の状況や伊藤と大久保氏の関係などが記されている。

さて、大久保氏らの貴重な業績を踏まえたとき今後の研究方向としてどのようなものが考えられようか。

まず、伊藤の経歴と思想には、白樺派的なものといってもいい、大正デモクラシー期の地方青年と共通する特徴がうかがわれる。時代状況と伊藤の自我形成(宗教への関わりや農本主義的な思想の形成など)との関わりが考えられよう。その際にはライフコースの視点からの分析も重要になるだろう。

また、伊藤の政治・社会活動の面も今後分析に値しよう。村議、県議および県行政における彼の活動はまだ十分に解明されていないように思われる。文書資料の発掘がすすめば、戦中・戦後の革新系地方政治研究に寄与するであろう。

くわえて、移民研究のなかでの伊藤の位置づけも問われてこよう。開拓に捧げた伊藤の後半生を概観するとき、評者は満州移民のある中堅人物——富樫直太郎氏²⁾と家族の人生を想起せざるをえない。富樫氏の経歴は小説『庄内平野』(丸山1940)として脚色されることで全国に知られ、また富樫(1979)や森(2001)によって引揚げ時の悲劇と帰国後の活動が知られている。評者はこれまで何度か富樫氏の家族・親族に話を聞く機会があったが、そこから感じたことは、結果責任を断罪することからは掬い取れない当事者の夢や想いと、当人が家族・子孫に与えた顕在的・潜在的影響であった。それらをどのように掬い取り分析していくべきか。こうした課題は南米移民の中堅人物であった伊藤の場合にも——むろん伊藤の移民は成功したのではあり満州移民とは異なるが——通底しているように思われる。

現在、伊藤の顕彰活動は地元の伊藤勇雄顕彰会や東京のマハラバ文庫(増田レア氏主宰)などによりおこなわれている(マハラバ文庫2010)。こうした顕彰活動を通じて、彼の思想と行動が家族・親類縁者さらには地域社会や関連団体に与えた多様な影響をも検討していくことも可能であろう。

注

- 1) 伊藤が夢みた「人類文化学園」と称する学校。
- 2) 山形県東田川郡旧大和村の出身(1902(明治35)年-99(平成11)年)。満州農業移民は送出形態によって大日向型、南郷型、庄内型の3つに分けられるが、大和村は庄内型の典型村落である。

文献

- 相田洋, 2003, 『航跡 移住31年目の乗船名簿』日本放送出版協会。
- 大久保好唯, 1984, 『開拓の詩人伊藤勇雄の世界』女性仏教社。
- , 1995, 『夢なくして何の人生ぞ—伊藤勇雄の生涯—』地方公論社。
- 佐藤政敏編集責任, 1999, 『外山開拓五十年の歩み—伊藤勇雄生誕百年記念—夢なくして何の人生ぞ』外山開拓五十年記念祭実行委員会。
- 富樫昭治, 1979, 『故国を指して幾百里』東北出版企画。
- マハラバ文庫, 2010, 『山仕事賛歌』。
- 丸山義二, 1940, 『庄内平野』朝日新聞社。
- 森武麿, 2001, 「満州移民—帝国の裾野—」歴史科学協議会編『歴史が動く時』青木書店。